

B-167 岩手県にのこる縞帳，織帳とその背景  
中屋洋子

目的 かつて機を織る家では縞帳は欠くことのできない教本であった。今回岩手県二戸市の五日市家，奥家に残る縞帳，織帳について由緒を尋ねることを得たので，これらの資料から，岩手県の江戸末期～明治以降の染織の一端をうかがう事とした。また岩泉町の中村家，宮守村の熊谷家，二戸市の小保内家の縞帳とも比較しようとする。

方法 縞帳の素材・染織の特徴，織り帳の織り名と織り方の検討，所蔵者からの聞きとり，文献調べ。

結果 五日市，奥，小保内家のある二戸市は，県北の中心地で，鹿角，八戸とも交流があった。また中心の福岡町には，安政5年小保内孫陸によって結成され，のちにその子定身らが受け継いだ「会輔社」という青阜集団があり，それは明治17年まで続いた。この会輔社の事業は教育・産業・政治と多岐にわたるものであったが，この士族および代々の夫人によって意欲的に養蚕，機業，牧羊が殖産事業として研究実践されたことで，上流のすぐれた技術が一般の家庭に普及した。特に奥家はこの会輔社で技術を得たところが多い。

縞帳を年代別にみると，熊谷家：文化～天保，中村家（現在紫根染技術伝承者八重樫フジ氏所蔵）：文政8年頃，小保内家：安政～昭和36，）五日市家：文久～昭和，奥家：明治13，となる。材質は麻はほとんどなく，木綿，絹，交織であった。特に中村家の紬織は，色調，織り共洗練されたものである。織帳は，明治初～20年頃に写されたもので，五日市家約240種，奥家約100種でそのうち，名称で共通なものが約50種，また約53種については昭和6年発行の日本染織辞典で名称を確認した。尚36種は番号付けである。